

茶山 健太(Sayama Kenta)

2020～2022 年度奨学生

オックスフォード大学 地理環境学部 博士課程

先日、オックスフォード大学の日本人会に日本のある高校からアンケートの依頼が来ていた。各国の名門大学にコンタクトを取って探求学習を行う高校生たちの行動力に感心した私は、是非とも協力しようと思い、リンクをクリックした。だが、そのアンケートの目的を見たとき、どうしても回答することができなかった。“どうしたら天才になれるのか”という高校生たちが設置した問いに自分が答えることへの違和感がどうしても拭えなかったからだ。正直、生まれ持った能力が高いことを表す「天才」という言葉で形容されることはあまり好きではないし、世間から名門大学とされる場所に在籍することを「天才」であることと同義に扱われることにはもどかしさを感じる。若干の申し訳なさと共に、そのページを閉じた。

私は、博士課程としてこの大学に在籍するのは1年目なのだが、オックスフォードでの生活自体は3年目になる。この期間のうちに、多くの学友と「なぜ自分がオックスフォードにいると思うか」ということについて議論してきたが、実際一番多く聞く答えは、「運、コネ、周りの環境」といったものであった。高校生の時に数学のテストで9点を叩き出したこともあるような私も、よくこの質問に対して「運と周りの人々からのサポート」という答え方をする。日本に帰国した際、卒業した高校を訪ねた時にも、お世話になった先生から「本当に申し訳ないけど、お前がオックスフォードって未だ

に信じられないもん」と言われてしまったように、生まれ持った能力、才能だけで、今の自分の立場に辿りつけたとはとても思えないのだ。ただ、奨学金を頂きながらオックスフォード大学にて研究生活を送っている以上、もう少し具体的に、ここまで来ることができた理由を考えると、きっと行動力と問題解決能力の高さに行き着くのではないかと思う。

私は静岡県出身で、小学生の時に親の仕事の都合で2年間アメリカに住んだ後、親戚宅に居候し東京都の中高一貫校に通い、大学はアメリカの小さな大学に進学した。幼い頃からなんて度胸のある人だろうと思う方もいるかと思うが、東京に行ったのは、地元の小学校でのいじめから逃げるためであったし、アメリカの大学に行ったのも、出る杭は打たれるという常套句が存在する日本社会から逃げたいと思ったからであったというのが本質だ。確かに勇気が必要な決断だったのかもしれないが、自分から行動を起こさないと何も変わらないという強い危機感による選択だったように思える。ただ、これらの決断をしていくうちに段々と難しいことに挑戦していくことへの恐怖心が薄れていったこと、そして自分をサポートしてくれる人々を大切にしていくことを覚えていったのも事実かなと思える。

アメリカでの大学生活では、このチャレンジ精神に火がつき、ブラジルのアマゾン熱帯雨林のど真ん中にある都市、マナウスでのインターンシップ以上生活や、オッ

クスフォード大学への1年間の交換留学に行き着くことができた。これらの経験を振り返ると、これらの経験によって得られた問題意識や人脈が現在の研究に生かされていることは確かだ。数年前『逃げるは恥だが役に立つ』というドラマが日本で流行った(らしい)。私の経験が少しでも他の人々の参考になるとしたら、現実世界でも逃げることによって得られるものがあるということなのかもしれない。ただ、今振り返ってみて、私は自分がとった逃げという選択肢が恥ずべきものだったかという、そうでは無いように思える。どうしても自分の力で変えることができない難題にぶち当たった際に、その問題を解決するのではなく避けるというのは理にかなった選択肢であるはずだ。自分が納得できる逃げ先を見つけ、その場所に辿り着けるように努力をしたのであれば、それはそれで、立派な解決策だと私は考える。ただ実際問題、逃げてばかりでは自分の嫌なことを避けられるだけであって、自分自身のやりたいことを追求することにはつながらないというのも事実である。私は、大学に入っても何を勉強したいか、どういう仕事に就きたいかということもあまりよくわからず、実際何度も専攻を変更した。ただ、今研究を行っている文化遺産・自然遺産の保全という分野に出会ってからは、積極的な選択として、今の博士課程での研究まで進むことができているように感じる。後半では、私がどのようにしてこの分野に出会い、研究を進めていくことになった経緯について少し話をしていきたい。

私の研究テーマは、「アラビア半島南東部における、第四紀後半の大地の遺産の保全

体制の構築」というものだ。これを聞いて、私がどのような研究をしているのかイメージできる方は、ほとんどいないのではないかと思うので、はじめに、どのような研究をしているかを説明したい。大地の遺産とは主に、地球科学や地理学的に価値がある地質・地形・土壌などのことを指す。(英語では Geoheritage というのだが、これを直訳した地質学遺産という呼び方が間違っていることを私も最近になって知った。)主にアラブ首長国連邦、及びオマーンを含むアラビア半島南東部における第四紀(約250万年から現代を含む地質時代)後半の大地の遺産は、人類の繁栄が始まった時代から現代までの気候、環境の変化の記録を含む地形、地層が数多くあり、地球環境の変化の歴史だけでなく、過去の気候変動が人類に与えた影響を知ることができる、考古学にとっても非常に重要な記録である。古環境学と呼ばれるこの分野の研究が技術的に可能になったのは40年程前と、比較的新しい分野であることもあり、中東地域ではこの分野で重要なデータが取れる場所を遺産として保全する体制が整っていない。そのため、経済発展が著しいUAEやオマーンでは、遺産として保全されるべき地形がその価値を全く考慮されずに破壊されてしまっている現状があり、私の研究は、これらの地形が、現在どのような状況下であり、どのように保全されていくべきかを考えるものである。私が大地の遺産という単語を最近知ったということからも分かる通り、私はこの分野に昔からずっと興味があったわけではない。実際のところ、この分野に巡り合ったのは、本当に偶然が重なったからであると言えない。ただ、振り返ってみると、私の積極的に様々なことに能動的に取り組んでいく

姿勢が結果として偶然を呼び込んでくれたのかなと思える。

始まりは、挫折であった。当時、環境学と経済学を専攻しようとしていた大学二年生の私は、環境経済を専門とする教授を頼り、ブラジルのアマゾナス国立大学に半年間留学する予定でいた。しかし、ブラジル留学に行けることを確約してくれていたはずだったその教授が手続きを怠っており、この計画は頓挫してしまった。この留学のためにポルトガル語の語学学校に通うなど、準備を整えていた私は、大学生活全体の予定が狂ってしまったと非常に落ち込んだのだが、ここで食いが下がってはどうしようもないと思い、他の教授を巻き込みつつ、その教授に頼み込み、マナウスの環境保護局におけるインターンシップを夏休みの間行う機会を得ることができた。そして、留学としてはブラジルの代わりに、オックスフォード大学に、大学三年の一年間行くための選考を受け、運良く合格することが出来た。

ブラジルでの、インターンシップの経験は、私の世界観を大きく変えるものだった。環境保護局では汚職が蔓延しており、地球の肺と呼ばれることさえあるアマゾン熱帯雨林の保全を担っている組織とはとても思えない有り様だった。アマゾンの自然全てを守ることはどう考えても無理だろうと悲観的になっていた中、私はインターン後に行くことが決まっていたオックスフォードにて提供されている授業の中に遺産科学というものを見つけた。地球の宝とみなされるもの全てを守るのは難しいけれど、自然遺産・文化遺産と価値が確立された一定範囲のものであれば、どうにかして守り続けることができるのではないかと、そう思った私はこの授業を履修することにした。

オックスフォードでの遺産科学の授業は、私にとって今まで受けたどの授業よりも興味深いものであったと共に、この分野であれば自分にも何かできるのではないかと、という根拠のない希望を持たせてくれるものであった。そして、この機会を無駄にしていけないと思い、最後の授業後、その授業の担当教授に研究のアシスタントをすることが可能かを尋ね、博士課程の研究生の研究の手伝いをする事ができるようになった。その研究は、世界遺産・ロンドン塔に用いられている風化の非常に早い石材の保全というものであった。研究自体は、一つ一つの石を観察し、風化の度合いを調べるといふ、非常に地味で退屈な作業であったのだが、それを苦だと思わずに、面白いと思えたことが、この分野の研究をしようという覚悟と決心につながった。

その後、大学院でこの分野の研究をするために有利であると考え、専攻を環境学と地質学に変更し学部を卒業し、修士過程で、オックスフォードに戻ってくる事ができた。当初は、修士課程の後には就職をしようと思っていたのだが、ここで最後の大きな巡り合わせがあった。一年の交換留学中にお世話になっていた中東における古環境学が専門である教授（現在の私の指導教官 Ash Parton 博士）の下に挨拶に行ったのだが、その際に彼は、私が遺産科学に興味がありながらも、環境学と地質学の知識を持っていることに目をつけ、博士課程で中東における大地の遺産に関する研究をすることを勧めてきたのである。関心がある三つの領域の接点である研究の内容を聞いた私は、二つ返事で博士課程への進学を決めたのであった。

運、コネ、周りの環境、上記した経緯を讀

んだ後であれば、どうして私が現在オックスフォードに在籍している理由として、この三つの要素をあげるのかがわかっていただけなのではないだろうか。私自身は、これ以外に行動力と問題解決力の高さを前稿で挙げさせていただいたが、読者の皆様がどのようにお思いになられたかは非常に興味があるところである。まだオックスフォードでの博士課程は始まったばかりだが、恐縮ながら、私の経験が少しでも誰かの役に立てば非常に嬉しく思う。コロナ禍で、新しい挑戦をすることは難しい時期ではあるが、今までよりもより一層貪欲に物事に組みまなければいけないという自戒をもって、本稿を結ばせていただく。

以上